HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アンティゴネー・モチーフ　―ブレヒトの　「アンティゴネーモデル　1948」　を中心に―
Author(s)	瀬野, 晶子
Citation	独語独文学研究年報, 27, 14-24
Issue Date	2000-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26125
Type	bulletin (article)
File Information	27_P14-24.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アンティゴネー・モチーフ
—ブレヒトの『アンティゴネーモデル 1948』を中心に—

瀬野　晶子

アンティゴネーの再生力

国王クレオーンの禁令に反して、兄の遺体を埋葬し自らも死んでいくテーバイの王女アンティゴネーの物語、とりわけソポクレスの『アンティゴネー』は西洋世界において文学作品、哲学、思想などに広くモチーフとして用いられてきた。文学の中では「第二のアンティゴネー」と名がつく作品は枚挙に暇がない。トマス・メイの『テーベの王女アンティゴネーの悲劇』(1631 年イギリス)、クロード・ボワイエの『アンチゴーヌ』(1686 年フランス)、ピエール＝シモン・バランシュの散文叙事詩『アンチゴーヌ』(1814 年フランス)、ロベール・ガルニエの詩劇『アンチゴーヌ』(1850 年ドイツ)、ヴァルター・ハーゼンクレーヴァーの『アンティゴネー』(1917 年ドイツ)、アルトゥール・オネゲルの合唱劇『アンチゴーヌ』(1927 年フランス)、ジャン・アヌイの『アンチゴーヌ』(1944 年フランス)、カール・オルフの『アンティゴネー』(1949 年ドイツ)、ロルフ・ホーホフートの短編小説『ベルリンのアンティゴネー』(1958 年ドイツ) [1] などである。このような文学作品においての改作だけではなく、メタファーとして「アンティゴネー」という言葉が現実の個人に与えられたり、抵抗の象徴として使われることもある。

この章にある「再生」というのは、このように過去のモチーフが改作、メタファー、シンボルとして繰り返し用いられることの総称として用いている。ところで、アンティゴネーの他にも日常のメタファーとして文学の作品や人物が用いられることがある。例えば、シェイクスピアの作品や『ドン・キホーテ』も西洋文学の中で重要な概念としてしばしば取り上げられる。しかし、第二のマクベスや第二のドン・キホーテの存在はアンティゴネーほどではない。なぜ、アンティゴネーだけがこれほど繰り返し再生されるのだろうか。この問いに対して、『アンティゴネーの変貌』の中でジョージ・スタイナーは次のように答えている。

> 西洋の伝統の中では、様々のとき色々な場所で、正義と法の正面衝突、死者の権威と生者の権利の対立が繰り返されている。色々な時、様々の場所で飢えた若者の夢が大人の「現実主義」と衝突してきた。その際必ずといってよいほどわれわれが当てにしてきた、言葉、イメージ、議論の骨格、提喩、文彩、比喩があった。そのひとつひとつがアンティゴネーとクレオーンの文法に書かれてあるものだ。「アンティゴネー＋クレオーン」構文法とそれが表明されている神話は、われわれの意味論、われわれの知覚と発話を統括する基本的文法に内在している。言ってみれば、時代を超えて変形を繰り返す「特殊的普遍項」なのだ。[2]

ここでソポクレスの『アンティゴネー』のあらすじとスタイナーの言う「特殊的普遍項」を具体的にあげてみる。この物語はラブダコス家に代々襲う悲劇的な運命の一つである。オイディプスを始めラブダコス家の人々は運命によりそれぞれ悲運の死を遂げる。最後に残った王女アンティゴネーの悲劇は兄弟同士の争いで死んだ兄ポリュネイケスの遺体を埋葬することに始まる。ポリ

ュネイケスを国の背信者として埋葬を禁じる王クレオーンの法律に逆らって、アンティゴネーは道徳に従って埋葬を行う。怒ったクレオーンはアンティゴネーを処刑しようとし、洞窟に幽閉する。クレオーンの判断に対して息子でありアンティゴネーの婚約者でもあるハイモーンが異を唱えても彼の決意は変わらない。後に、予言者テイレシアースの忠告により、クレオーンは処刑を中止するが、すでにアンティゴネーは自殺してしまい、クレオーンの息子がその後を追い、さらに妻がその後を追って死んでしまう。クレオーンは一人、遅すぎた後悔をする。アンティゴネーがモチーフとして後世に何度も蘇るのは物語の中の様々な対立要素のためである。クレオーンの言う人の法とアンティゴネーの尊重する神の法の対立、国家と個人や家族の対立、老人と若者の対立、男と女の対立、生者と死者の対立、現実主義と理想主義の対立などのモチーフ、また、他にもアンティゴネーのポリュネイケスへの愛情からは近親相姦のモチーフが読み取られている。[3]

従来のアンティゴネー研究では、このモチーフの頻繁な再生力に関しては、常にソポクレスの『アンティゴネー』のもつ魅力やモチーフの多様性が中心に語られてきたが、その一方で再生する側である第二のアンティゴネー達の持つ要素に目を向ける機会は少なかった。そこで、この論文では、改作された作品を見ることでアンティゴネーの再生がどのように起こっているかを調べることにする。

すでに述べたように、アンティゴネーをモチーフにした作品は無数にあるが、ここではとくに第二次世界大戦後のドイツで、複数の作家がアンティゴネーを改作した時代に限定する。今回は、そのなかでも重要な位置を占めているベルトルト・ブレヒトの『アンティゴネー・モデル、1948』を扱う。上演後の当時の新聞批評でもこの作品の社会への影響が取り上げられている。[4] 新ビュンドゥナー新聞はスイスでの初演後にこの作品について、「私たちが先の大戦（第二次世界大戦）との類似点を認識するのは難しくない。」[5] と述べている。ビュンドゥナー日刊新聞も以下のように批評を載せている。

> この劇で見て取ることができるのはある一つのアンティゴネーであって、ソポクレスのあのアンティゴネーではない。つまり、この劇はあのギリシャ悲劇を指しているのではなく、部分的に内容を換えることによって現代に当てはまるということを示している。（中略）ブレヒトの『アンティゴネー』は時代を超えているにもかかわらず、現代に即したことが強調されている。彼は自らの創作によって、古代ギリシャ的な悲劇を今日の出来事のように私たちの前に起こさせる術を持っている。[6]

本論でこの作品を選んだ理由はもう一つある。ブレヒトはソポクレスの『アンティゴネー』をヘルダーリンの翻訳を「忠実に」使うことで改作した。その際、確かにブレヒトの創作部分もあるのだが、ヘルダーリンからかなりの部分を引用している。ブレヒトの作品が他の第二のアンティゴネーと異なるのはこの「忠実な」引用の多さである。再生というのは原型を蘇らせることであるが、例え再生しても、再生物にも固有性が備わってしまう。再生の中には模倣と固有という相反する要素が存在する。特に文学モチーフの再生の場合は、原型を模倣する部分だけでなく、再生の固有性にも重点がかかってくるのである。通常のアンティゴネーの再生では模倣は物語の構造、人物関係にとどまることが多く、文体や人物のセリフ、心理描写などは第二のアンティゴネーで

はかなり自由に創作されている。例えば、ジャン・アヌイの『アンチゴーヌ』は人物関係や物語の内容は基本的にそのままだが、台詞を完全に創作にすることで、クレオーンを現実の矛盾に苦悩する支配者に変え、アンティゴネーを無鉄砲な理想主義者に変えている。このように物語の枠組みだけを残して再生する場合は、比較的自由に原型の重点を変化させることや原型の作品に解釈を加えることができる。しかし、ジャン・アヌイなどのように創作部分がかなり許されている再生作品であっても、原型の制約をある程度受けた上で創作されることになる。この原型からの制約という条件はモチーフの再生を考える上で重要な問題になってくる。ブレヒトの『アンティゴネー』の場合はヘルダーリン翻訳の引用を用いているので、この制約がより強くなる。その点で原型のアンティゴネーとの比較が可能で、制約という条件のもとで再生を観察するのにより適した作品なのである。このような理由から本論ではブレヒトの『アンティゴネー』を取り上げることにした。

ブレヒトの『アンティゴネー』

この作品の背景について少し触れておくと、これはブレヒトがアメリカ亡命からの帰国後初めて手がけたものであり、ソポクレスの『アンティゴネー』をヘルダーリンのドイツ語翻訳を忠実に使用することで改作したものである。初演はスイスのクールで 1948 年 2 月 15 日に行われた。ついで、1951 年 11 月 18 日にドイツのグライツで公演された。その後、1955 年に『ソポクレスのアンティゴネー』としてさらに改作され、ブレヒト全集にはこちらがおさめられている。

ヘルダーリンの翻訳を使用しながらも、物語の内容には若干の変化が見られる。まず、序幕はブレヒトの完全な創作である。「ベルリン、1945 年 4 月。夜明け」と看板が掲げられた舞台にアンティゴネーともイスメーネとも取れるような 2 人の姉妹が登場し、戦争に行ったはずの兄が家の前でナチスの親衛隊に銃殺される音を聞く。そのあと、第二のアンティゴネーの物語が始まる。この序幕との関連については一切劇中で触れられることはない。他に物語の変更が行われるのは最終部である。テーバイがアルゴスとの戦争の勝利に浮かれている間に、アルゴスに逆襲され、登場人物の悲劇と共に国の滅亡が暗示されて物語は終わる。

再生の問題を見ていくに当たって、特にヘルダーリンの引用に変化が起きている次の二つの場面を取り上げる。そこでは、原型の引用箇所の字面では違いは認められないが、その前後を削除したり、ブレヒトの創作部分を挿入することで引用の意味内容が変化している。そこで、モチーフが再生される際に、原型の模倣部分がどのように変化し、創作部分に関わるのかをヘルダーリンのテクストとブレヒトのテクストを比較していくことによって確認していくことにする。取り上げるのは、遺体埋葬の犯人がアンティゴネーだとわかった後のアンティゴネーとクレオーンの対話の場面と、処刑の決まったアンティゴネーの嘆きの場面である。なお、台詞の冒頭に付した数字は原文中の行数で、斜字体の部分はブレヒトによってヘルダーリンから引用されている箇所であり、特に注目すべきところは下線で強調した。

アンティゴネーとクレオーンの対話

まずヘルダーリンのテクストを見てみる。(H529-543)

529: Kreon: Siehst du allein diß von den Kamiern?

クレオーン：カドモスの民であるテーバイ人の中でお前だけがそんなことを考えているのか？

530: Antigonae: ***Auch diese sehn´s,*** doch halten sie das Maul dir.

アンティゴネー：*ここにいる人たちも同じように考えている。*
彼らはあなたの前で口をつぐんでいるだけ。

531: Kreon: *Schämst du dich nicht, die ungefragt zu deuten?*

クレオーン：*勝手にそんなことを言って恥ずかしくないのか？*

532: Antigonae: *Man ehrt doch wohl die Menschen eines Fleisches.*

アンティゴネー：*身内である兄を大事に思うことは恥ずかしいことではありません。*

533: Kreon: *Und eines Bluts noch auch ist, der für ´s Land gestorben.*

クレオーン：*国のために死んだもう一人も同じ身内だろう。*

534: Antigonae: *Eins Blutes. Kind eins einigen Geschlechtes.*

アンティゴネー：*そのとおりです。同じ親から生まれたきょうだいです。*

535: Kreon: Und du bringst doch Gottlosen einen Dank?

クレオーン：それならお前は不敬な感謝の気持ちをその兄に寄せるのか？

536: Antigonae: Das läßt gewiß nicht gelten der Entschlafne.

アンティゴネー：死んだ兄はそんなふうにとらないでしょう。

537: Kreon: *Freilich. Wenn dir als Eins Gottloses gilt und anders.*

クレオーン：*なるほど。お前には不敬なことをした兄ももう一人の兄も同じなのか。*

538: Antigonae: *Nicht in des Knechtes Werk, ein Bruder ist er weiter.*

アンティゴネー：*亡くなった兄は奴隷ではない。兄であることに変わりはありません。*

539: Kreon: Verderbt hat der das Land; der ist dafür gestanden.

クレオーン：一方は国を滅ぼし、一方は国のために死んだのだぞ。

540: Antigonae: Dennoch hat solch Gesetz die Todtenwelt gern.

アンティゴネー：それでも死者の世界では神の法が用いられています。

541: Kreon: Doch, Guten gleich sind Schlimme nicht zu nehmen.

クレオーン：いいや、良い者は悪い者と同じように扱われるものか。

542: Antigonae: *Wer weiß, da kann doch drunt´ ein andrer Brauch seyn.*

アンティゴネー：*あの世でも人の法が通用するかどうかわかるものですか。*

543: Kreon: *Nie ist <u>der Feind</u>, auch wenn er todt ist, Freund.*

クレオーン：*敵というものは死んだ後でも決して味方にならない。*

ヘルダーリンでは、この対話はクレオーンの演説に続いてアンティゴネーとクレオーンの二人だけで行われている。二人の相反する意見をもった登場人物がテンポよくセリフを言い合う場面である。H529 から H539 ではアンティゴネーとクレオーンがポリュネイケスの非をめぐって議論する。クレオーンは国の背信者としてポリュネイケスを非難し、アンティゴネーはそれでも自分の身内であることに変わりはないと主張する。続いて H540 から H543 では、国の法律で兄の埋葬を禁止したクレオーンに対してアンティゴネーが反論する。ここでは、ポリュネイケスの遺

体埋葬をめぐって法律について議論されている。クレオーンは、埋葬を禁ずるという人が作った法律の正当性を主張し、アンティゴネーは、死んだ人は誰であれ埋葬しなければならないと道徳としての神の法律を主張する。最後のクレオーンの台詞では、たとえ死んでもポリュネイケスが国家の敵であることにかわりはない、という主張になっている。

次にブレヒトのテクストである。(B398-488)

398: Kreon: So glaubst du, andre sehns wie du es siehst?

クレオーン：お前は自分が他の者と違う考えをしているのがわかっているのか？

399: Die Alten: ***Auch diese sehn´s,*** auch diese sind betroffen.

長老たち：*ここにいる者たちもそう考えています。*彼らも動揺しています。

400: Kreon: ***Schämst du dich nicht, die ungefragt zu deuten?***

クレオーン：勝手にそんなことを言って恥ずかしくないのか？

401: Antigone: ***Man ehrt doch wohl die Menschen eines Fleisches.***

アンティゴネー：身内である兄を大事に思うことは恥ずかしいことではありません。

402: Kreon: ***Und eines Bluts noch auch ist, der fürs Land gestorben.***

クレオーン：国のために死んだもう一人も同じ身内だろう。

403: Antigone: ***Ein´s Blutes. Kind ein´s einigen Geschlechts.***

アンティゴネー：そのとおりです。同じ親から生まれたきょうだいです。

404: Kreon: Und der mit sich gespart, der gilt dem andern gleich dir?

クレオーン：それでは戦場でろくな働きをしなかった者をもう一人の兄と同じように大事に思うのか？

405: Antigone: ***Der dir ein Knecht nicht war, ein Bruder ist er weiter.***

アンティゴネー：亡くなった兄はあなたの奴隷ではない。兄であることに変わりはありません。

406: Kreon: ***Freilich, wenn dir als Eins Gottloses gilt und andres.***

クレオーン：なるほど。お前には不敬なことをした兄ももう一人の兄も同じなのか。

(407-486 はブレヒトのオリジナルの対話。アンティゴネーは私利私欲のための戦争だったとクレオーンを責める。)

485: Kreon: Geh jetzt! Uns warst du Feind und bleibst´s auch unten,(中略)

クレオーン：さあ、行け！お前は私たちの敵だ。そしてあの世でも敵のままだ。(中略)

487: Antigone: ***Wer weiß, da kann doch drunt´ ein andrer Brauch sein.***

アンティゴネー：あの世でも人の法が通用するかどうかわかるものですか。

488: Kreon: ***Nie wird ein Feind, auch wenn er tot ist, Freund.***

クレオーン：敵というものは死んだ後でも決して味方にならない。

ブレヒトでは、両者の対話の対称性が途中で崩れている。H530 のアンティゴネーの台詞を B399 でコロスの長老たちが言う。B400 でクレオーンもその台詞に対応するので、アンティゴネーとクレオーンの対称性はなくなる。その後も、対話は続くが、ブレヒトのオリジナルの対話へと

移行する。H538 のアンティゴネーの台詞では兄のポリュネイケスは単に奴隷ではないという表現になっているが、B405、下線部では“dir“が入り、クレオーンとの関わりでポリュネイケスが述べられることになる。これは先にも触れた通り、ポリュネイケスの死はもう一人の兄エテオクレスと国の支配権を巡る兄弟の争いから生じた戦争によるものであり、クレオーンとは一切関係のないものである。クレオーンは兄弟の死後、支配者がいなくなったために後継としてやってきたに過ぎない。しかし、ここに dir と入ることで、クレオーンが戦争や兄の死に無関係ではなくなってくる。あたかもクレオーンのせいでポリュネイケスが死んだという主張になり、この後の戦争批判に結びついていくのである。また、この台詞まではヘルダーリンの原型の制約の中で物語が進行してきたが、ここからは少し創作の流れが出てくる。B407 から B486 までの 79 行に渡って、ブレヒトの創作箇所が挿入される。

ところで、この両者の対話は、一般にアンティゴネー悲劇の最大の見せ場となるところである。ヘルダーリンでは、ポリュネイケスの埋葬についての法をめぐって議論されているが、ブレヒトでは、話題がポリュネイケスの戦死からさらに戦争への非難へと移っていく。ヘルダーリンの場合、前半は常にポリュネイケスが話題の中心になっている。クレオーンはあくまでポリュネイケスの非を主張し、アンティゴネーはそれを否定する。さらにその埋葬に関連して、後半に法についての両者の意見が述べられる。そして、H543 の下線部 der Feind とは国の背信者としてのポリュネイケスを指す言葉なのである。一方、ブレヒトでは、ポリュネイケスについて 6 行の対話がなされるが、その後の 79 行は戦争についての話である。兄についての話題は戦争被害の一例となり、その後の本題の序となるにすぎない。アンティゴネーが戦争を非人間的なものとして批判するのに対して、クレオーンは国のための正当な手段であると反論する。ここで、アンティゴネーは戦争によって国が得たものを享受することを拒む。こうして、ブレヒトの創作部分である 79 行中の B485 の下線部 Feind は、このアンティゴネーに向けられた言葉になる。続く B488 下線部 ein Feind もポリュネイケスではなく、戦争を否定するアンティゴネーを指す言葉に変化する。対話の終盤では、戦争や国家を巡る法が話題になり、ここでいう法はポリュネイケスの遺体埋葬を禁じた法とはすでに無縁のものである。このようにクレオーンとアンティゴネーの対立要因である話題が変化することで、アンティゴネー悲劇の引き金でもあり、中心的な話題でもあった兄の遺体埋葬には、もはや重点が置かれなくなってしまう。

アンティゴネーとコロス（長老たち）

次にコロスとの対話の場面を見てみる。まずヘルダーリンのテクストである。（H835-913）
対話の概要（835-881）:死を嘆くアンティゴネーは、自分の死を、同じく運命により非業の死を遂げた神話のニオベーの死と重ねるが、コロスは運命という共通点はあっても、神の子と人の子という違いがあると説く。
(本文より)

882:Chor: Mitwohnend Lebenden nicht und nicht Gestorbnen.
Forttreibend bis zur Scheide der Kühnheit,
Bis auf die Höhe des Rechts,
Bist du, o Kind, wohl tiefgefallen,

Stirbst aber väterlichen Kampf.

コロス：一緒に生きてくれる人も死んでくれる人もいない。

勇敢さのぎりぎりのところまで追いやられ、

正義の極みまで行き着いて、

あなたは死んでいくのでしょう。

でも、あなたは父親の引き起こした争いのせいで死ぬのです。

887:Antigonae: Die zornigste hast du angereget

Der lieben Sorge,

Die vielfache Weheklage des Vaters

Und alle

Unseres Schicksaals,

Uns rühmlichen Labdakiden.

（中略）

アンティゴネー：あなたは私の大切な悩みの最も痛いところをつきましたね。

父の何重もの嘆きについて、

私たちの家の運命全てについて、

私たち名高いラブダコス家について。

（以下、一家に相次いだ不幸について語る）

903: Chor: Zu ehren ist von Gottesfurcht

Etwas. ***Macht aber, wo er die gilt,***

Die weichet nicht. Dich hat verderbt

Das zornige Selbsterkennen.

コロス：神の威信を尊ぶことは大切です。しかし、*権力はそれが有効なところでは屈服することができない。怒りにまかせた自己認識があなたを滅ぼすのです。*

(概要)アンティゴネー：再び嘆く。

ヘルダーリンのこの場面では、死を嘆くアンティゴネーに対して、コロスは常に運命としてそれを説明する。アンティゴネー自身も死が運命によるものとしている。そして、彼女は同じように運命によって死ぬことになったニオベーの話をし、コロスも運命という点で彼女とニオベーの類似点を認める。この場面に至るまではアンティゴネーの死は兄の遺体埋葬によるものであって、クレオーンの命じた処刑という因果関係の中で捉えられ、それが物語として語られてきた。ここにきて、そのポリュネイケスやクレオーンについての話題はなくなり、彼女の死はラブダコス家の一連の不幸な運命の一つとして捉えなおされる。

H882 では埋葬行為による死について触れているものの、H886 で父オイディプスを始めとする運命が死の原因だと断言されている。この後、アンティゴネー自身もその考えに同調していく。H903 ではアンティゴネー自身の思いつめた行為が死を招いたと再びコロスは話題にするが、全体として運命がこの場面の中心を占めている。ソポクレスの『アンティゴネー』は、兄の遺体埋葬という大筋のほかに、運命悲劇という側面も持っている。これは物語の要であり、ここで再三

に渡って運命が取り上げられるのもその為である。

次にブレヒトのテクストの対応部分を見ていく。(B752-859)

対話の概要

アンティゴネー：死を嘆く。

長老たち：あなたは名声を得て死んでいく。

アンティゴネー：(ニオベー神話削除) 再び死を嘆く。

(本文より)

782:Die Alten: ***Macht, wo es die gilt,***

die weichet nicht. Die hat verderbt

das zornige Selbsterkennen.

長老たち：***権力はそれが有効なところでは屈服することができない。***

怒りにまかせた自己認識が権力を滅ぼすのです。

(以下概要)

アンティゴネー：ラブダコス家の運命について削除。

一家に相次いだ不幸について。

長老たち：ダナエー神話について。(ヘルダーリンの他の場面からの引用)

運命の恐ろしさについて削除。

アンティゴネー：ニオベー神話。

長老たち：(ニオベーと同じような運命で死ぬというところ削除)

以下はブレヒトのオリジナルの対話。長老たちは他の神話の死について話す。

(本文より)

834:Die Alten: Aber des Geschicks ist furchtbar die Kraft.

Nicht Reichtum, der Schlachtgeist nicht,

kein Turm entrinnt ihm.

長老たち：しかし、運命の力というものは恐ろしい。

富も戦いの神も勝利を祝う塔もそれを免れることはない。

837:Antigone: Nicht, ich bitt euch, sprecht vom Geschick.

Das weiß ich. Von dem sprecht,

der mich hinmacht, schuldlos; dem

knüpft ein Geschick!

アンティゴネー：お願いだから運命について話さないで。

そのことはわかっています。あなたたちは私が死ぬということについて

運命と結びつけて無邪気に話す。

以下はアンティゴネーが自分の死について話す。

ブレヒトのこの場面ではまず、H905 のコロスの台詞は、下線部 Dich から見て、アンティゴネーに対するものとなっていたが、ここを引用しながらも B783 を Die とすることで、権力を指

し示す。これにより、ナチスと物語中のテーバイの崩壊が同時にほのめかされる。

全体としては同じように兄の埋葬については話題にならないが、この場面の前半でのニオベー神話については削除されており、アンティゴネーの嘆きのすぐ後に、B782 でヘルダーリンの最後の部分が引用され、彼女の死はあくまで思いつめた行為の結果として捉えられる。そのあと、相次ぐ一家の不幸について語られるが、それが一族を襲った不運のためだというところは削除されている。続いて、ヘルダーリンの別の場面からダナエー神話が引用されている。これはアルゴス王アクリシオスの娘の話で、ダナエーから生まれる子に王位を奪われると神託を受けた王が、彼女を青銅の室に幽閉するものの、雨粒に変身したゼウスが忍び込み、結局運命どおり彼女は子供を産むという内容である。ブレヒトではこの物語の後半が一切省略されたので、幽閉されて死んでいくという点にアンティゴネーとの類似点が見出される。しかし、運命を避けることができなかった例としては用いられていない。さらに、先ほど削除されたニオベー神話が出てくるが、これに対する長老たちの同意は削除される。その為、この神話も運命に翻弄された神の子の物語ではなく、幽閉されて死んでいくという点にアンティゴネーとの類似点が見られる。これ以降はブレヒトのオリジナルになる。その最後の部分で長老たちはやっと運命としてアンティゴネーの死を捉えるが、彼女は激しく否定する。したがって、運命悲劇という要素がここでは喪失している。

以上見てきたように、二つの場面を通してアンティゴネー悲劇の二大柱となる遺体埋葬、運命悲劇という要素はブレヒトでは取り除かれている。それも、ブレヒトの創作部分においてではなく、創作の挿入や省略という手法を用いて、ヘルダーリンの『アンティゴネー』の引用部分からその重点を消し去っている。ポリュネイケスの遺体埋葬の正当性をめぐるアンティゴネーとクレオーンの対話は、アンティゴネー物語のクライマックスであり、最も緊迫する場面である。しかし、この場面は引用されることによって、ブレヒトの創作部分の戦争批判の序へと変化し、もはや山場ではなくなる。物語のクライマックスの位置がアンティゴネーの戦争否定の主張に移されたことによって、この古代ギリシャの物語は上演当時の社会との接点を持つ。つまり、序幕に続いて、物語全体が第二次世界大戦との関連を示唆するのである。

コロス

これまで見てきたところでは、ブレヒトの『アンティゴネー』はヘルダーリン翻訳の制約の中にあるので、原型の古代ギリシャという枠組みはしっかりと保たれていた。クレオーンやアンティゴネーの台詞がどれほど変化していても、それはあくまで古代ギリシャの登場人物のものであった。しかし、ブレヒトの操作により時代性が加えられていることも確かである。この時代性については当時の新聞の演劇批評も指摘している。ところで、時代性を与えるものとして、さらにコロスの存在があげられるだろう。ブレヒトではコロスの歌唱はかなり自由に創作されている。

ヘルダーリンのテクストの第 1 スタシモンでは、人間は自然を意のままに操ることができるがその傲慢さゆえに国が滅びることもあると歌われている。これがブレヒトでは、人間は知恵を持っているが人間同士の不和や争いにはその力を発揮し得ないという内容になっている。ここでは歌の中で登場人物の名前や直接物語に関連することは語られておらず、物語の中に突然入ってくるという形になっている。しかし、ここで歌われる争いというのが序幕や上演された時代から先

の大戦を指すことは明らかである。続く第2スタシモンでは、ヘルダーリンではラブダコス家の運命と人間が運命や災いに非力なことが歌われているが、ブレヒトでは暴君の支配に庶民が翻弄される様子が歌われている。この際、運命に翻弄されるという点は削除されている。ここでも登場人物のことについては具体的に触れていないが、この歌唱のあとにクレオーンの支配者としての決断をめぐってハイモーンとの対話がくるので、以降のクレオーンが暴君性を備えた支配者であるという見方に変化してくる。また、このスタシモンでも先の大戦との関連がほのめかされる。第3スタシモンでは、ヘルダーリンではエロースが正しい者の判断を狂わせたという内容だが、ブレヒトでは勝利に酔うディオニュソスの賛歌になっている。そして権力や支配者について述べられていく。ここでも登場人物には具体的に触れてはいないが、ディオニュソスを祭ることで勝利を祝うというのは、物語中でクレオーンが提案したことであり、前の歌唱に比べると物語との接点が出てくる。また同じく、過去の戦争との関連もここで示される。第4スタシモンでは、ヘルダーリンでは運命に翻弄された人物の神話が挙げられ、ダナエー、リュクールゴス、ピーネウスの二人の子供について、それぞれ具体的に述べられる。ブレヒトでは死の直前のアンティゴネーの様子と勝利に浮かれる町の様子が歌われる。ここで初めてコロスの歌唱に登場人物の描写が出てくる。そして、物語中の勝利に浮かれる町の様子も描かれる。この歌唱では物語との接点は出てくるが、先の三つのスタシモンと違い、先の大戦との関わりは見られなくなる。最後のスタシモンでは、ヘルダーリンではディオニュソスへの呼びかけになるが、ブレヒトではさらにその後、敵国アルゴスの逆襲が伝えられる。ここからは、物語の流れがヘルダーリンとは完全に変わる。このスタシモンはそのきっかけともなる箇所である。そしてヘルダーリンの最後の歌唱では、アンティゴネーの自殺と家族の死を知ったクレオーンの遅すぎた後悔が歌われる。ブレヒトでは、ここではクレオーンの後悔だけでなく、国の崩壊が告げられる。

このように、ブレヒトのコロスの中では、前半は物語とそれほど接点をもたずに、先の大戦が示唆される。そして物語との接点を持つにつれて、コロスによって登場人物の見方が変化していくのである。アンティゴネーは兄を思う妹でも、運命に翻弄される王女でもなくなり、支配者による一犠牲者となる。クレオーンも国の支配を純粋に考える王ではなく、暴君として見られるようになる。その結果、ブレヒトの『アンティゴネー』はたんなる古代ギリシャの悲劇ではなくなり、新しい時代性を持つ第二のアンティゴネーになる。

結論

本論ではブレヒトの『アンティゴネー』の二つの場面とコロスを見ることで、どのように再生が起こっているかを観察してきた。このテクストの場合は引用を多く用いているので原型からの制約がよりはっきりしてくる。しかし、実際にはその制約に拘束されているわけではなく、逆にその引用箇所にこそ再生作品の別の可能性が見出されている。ブレヒトは原型の台詞をある程度保存しながら、同時に加工も行い、創作や削除によって、物語の重点や観点をずらしている。そのため、「なぜアンティゴネーは死んだのか？」という当然のことが、遺体埋葬でも運命でも説明できなくなってしまう。物語は観客の知っているソポクレスの『アンティゴネー』通り進行するが、ヒロインの死は明らかにナチスの犠牲を思わせるものになっている。

この作品に続く1950年代は、他にもアンティゴネーの再生作品が相次いで生み出された時代

である。それらにおいてどのようにこのモチーフが再生されているのかを考えていくことが、今後の課題である。

注釈

---

1) ジョージ・スタイナー 『アンティゴネーの変貌』 海老根宏、山本史郎訳 みすず書房 1989年、196-275ページ

2) 同書 195ページ

3) スタイナーは同書の中で、第二のアンティゴネー作品の中にアンティゴネー・モチーフの対立項が解釈されているだけでなく、哲学、思想の発想の原点にもなっていると述べている。彼は例として次の二人をあげている。ヘーゲルにおいては国家と個人の対立として用いられ、アンティゴネーの死とクレオーンの後悔によって国家の方針の修正が行われ第三の道が見出される。ここに彼の弁証法の根源が見られる。(25-54ページ) またキルケゴールはアンティゴネーが父オイディプスの罪を知っていたのかという問題に触れ、秘密保持と罪の世代間の伝達のモチーフを読み取った。罪の伝達はキリストの救済の約束によって否定されてはいるが、人類の日々の実存に依然として影を落としているとして、著書『あれかこれか』の中で苦悩する人物が描かれている。(79-85ページ)

4) ここで挙げるほかにも以下のものがある。「1945年4月の破壊されたベルリンを舞台にした序幕で、ブレヒトは古代モチーフを直接現代と結び付けている。この序幕は作者の見解を明らかにしている。古代の運命悲劇から時代と非常に強く結びついた世界像が生じた。抵抗するというテーマはこの世界像に基づいている。アンティゴネーはもはやクレオーンの命令に反して兄ポリュネイケスの遺体を埋葬する愛すべき妹ではなくて、全体支配の暴君に猛烈に反発するレジスタンスのヒロインになった。」pz, „ Schauspielhaus Zürich ,Die Antigone des Sophokles von Bert Brecht" In: Neue Züricher Nachrichten, 16. März 1948. (In: „Brechts Antigone des Sophokles" Werner Hecht, Frankfurt am Main,1988,S.208) 「ベルトルト・ブレヒトはこの神話劇に次のような問いを立てた。今日の私たちがアンティゴネーを真実として、影響があるとして、説得力を感じるほどの時代を超えた意味はこの作品のどこにあるのか。神への信仰についても、国の要求についても、家族の価値についても、彼は悲劇をもたらす何のモチーフも見出していない。それ故に、彼は徹底して決定的にそれらのモチーフを削除した。その代わり、「偏見」や「幻想」から自由になった根拠付けを見出している。一方で、それは不安になるほど現代に即している。(中略)序幕の「1945年4月ベルリン」というのはこの物語が現代に即していることを強調している。」Bruno Snell, „Die ‚Antigone'- Bearbeitung von Bert Brecht (Aufführung in Chur)" In: Die Tat, Zürich, 19. Februar1948. (In: Hecht, S.207) 「ここで扱われている問題、つまり、人間性や愛に対する権利の擁護、不正と判断される戦争への反対、暴力という不遜な行為、その没落。これらの問題は非常に現代に即したものではないだろうか？」Jürgen Rühle „Bertort Brechts ‚Antigone'. Deutsche Erstaufführung der Modell- Bearbeitug nach Sophokles und Hölderlin" In: Berliner Zeitung, 21. November 1951. (In: Hecht, S.220)

5) Be., „Antigone, ein Trauerspiel von Sophkles. Uraufgeführt zu Athen im Jahre 442 v. Chr." In: Neue Bündner Zeitung, 18. Februar 1948. (In: Hecht, S.195)

6) Andreas Bürger, „Gelungene Aufführung der Antigone" In: Bündner Tageblatt, Chur, 18.und 19. Februar 1948. (In: Hecht, S.200)

参考文献

- Brecht, Bertolt : ANTIGONEMODELL 1948 Berlin, 1949
- Baldo, Dieter : Bertolt Brechts „Antigonemodell 1948" Theaterarbeit nach dem Faschismus Köln 1987
- Hecht, Werner: Brechts Antigone des Sophokles, Frankfurt am Main 1988
- Hölderlin, Friedrich: ANTIGONAE. In: Hölderlin Sämtliche Werke 5. Stuttgart 1952
- Sophokles : Antigone. Griechisch- Deutsch übersetzt von Norbert Zink, Stuttgart 1981
- ジョージ・スタイナー:『アンティゴネーの変貌』海老根宏、山本史郎訳、みすず書房 1989年

(博士後期課程)